

## 論文審査の要旨

報告番号	修 第 1290 号	氏 名	保 坂 雄 太 郎
論文審査担当者	主査 宮 川 哲 夫 副査 富 田 真 佐 子 副査 鈴 木 久 義		
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>「造血幹細胞移植後の身体機能の経時的変化」について、移植を施行された患者の移植前、無菌室退室時、退院までの期間に身体機能の経時的変化を種々のパラメータを用いて観察測定し、回復過程の傾向、身体機能の推移の仕方に影響する因子、各パラメータの関連性を明らかにした研究である。血液内科に入院し同種移植を施行され、転院、死亡、生着不全例を除いた 41 症例を対象としている。</p> <p>測定項目は握力、膝関節伸展筋力、6 分間歩行距離、Berg balance scale、立位体前屈、Barthel index、ECOG Performance status scale、Visual analog scale を測定している。測定時期は、無菌室入室直前、造血幹細胞生着直後、退院時の 3 時点と、生着直後と退院時の間において可能な限り行っている。</p> <p>その結果は以下のとおりである。握力は生着直後に 3.3kg (12%) 低下し退院時も更に 4.1kg (18%) 低下していたが、膝伸展筋力は生着直後に 51.1N (18%) 低下し、退院時には 34.1N (12%) 回復していた。また、持久力、柔軟性、身体活動量、バランスは生着直後には低下するが、退院時には移植前に回復が認められた。</p> <p>この原因は、活動量の改善に伴い下肢筋の使用頻度や負荷は向上し、理学療法プログラムの筋力増強訓練が下肢・体幹筋に対して実施されており、上肢筋の訓練内容が少ない事や入院中の生活動作で上肢へ負荷がかかる動作が少ない事が考えられている。</p> <p>今後、菌室入室から退院までの活動量の低下や筋活動の減少による廃用性筋萎縮以外に考えられる原因を追究する必要があるとし、栄養状態、薬剤の使用状況、GVHD 精神機能や認知機能、発熱や下痢、疼痛、BMI などの身体症状と筋力低下の関連性について、今後の検討課題としている。</p> <p>過去の報告では、本論文のような詳細な検討はなされていない。また、研究目的、方法及び得られた結果の分析も明確に示されており、先行研究に関する検討も適切に行われている。今後の臨床に応用できる可能性は非常に高いものと思われる。したがって、本論文は修士（保健医療学）の学位に相当するものであると判定する。</p>			